

やんま

小川未明

青空文庫

正ちゃんしょうちゃんは、やんまを捕とりました。そして、やんまの羽はねについた、もちを取とっていると、ぶるつとやんまは、羽はねを鳴ならして、手てから逃にげてしまいました。

「あつ。」と、いって、その逃にげた方ほうを見送みおくると、よく飛とべないとみえて、歩あるいてゆくおばあさんの背中せなかにとまったのです。

正ちゃんしょうちゃんは、胸むねがどきどきしました。どうしたら、うまく捕とらえることができるだろうと思おもったからです。

正ちゃんしょうちゃんは、気きづかれないように、おばあさんの後あとを追おいかけました。いくらおばあさんでも、動うごいていると、知しられぬように、うまく捕とらえられるものではありません。正ちゃんしょうちゃんは、ため息いきをつ

きました。しかし、ゆうき勇気を出して、おばあさんのうしろへ行って、て手を伸ばしました。

した下を向いて、おばあさんは、なにかかんが考えながらある歩いてみると、だれか、たもとにさわったようなき気がしたので、うしろをふ振り向くと、どこかのかわいらしいこ子が、あと後からついてきたのです。

「へへへへ、ひとちが人違いでございますよ。」と、おばあさんは、笑わらつて、そのままゆきかけたのでした。

「だめだなあ、あんなところに、うまくとまっているんだもの。」と、しょう正ちゃんしやうはうらめしそうに、やんまを見つめていましたが、もう一度どと捕らえられるものか、やってみようと、また足あし音をたてぬようにして、おばあさんのあと後を追ったのであります。

おばあさんは、また、だれかたもとのあたりにさわったので、はつとして振り向いてみると、先刻の子供が、しつこく自分の後を追つてきたのでした。

これは、人違いでないと思ひました。そして、顔に似合わぬ、なんという、いやな子だろうと思ひましたから、おばあさんは、怖ろしい目つきをして、にらんだのでした。子供は、おばあさんにしかられると、そのままあちらへ駈け出していつてしまったのであります。

おばあさんは、お家へ帰りました。家の人たちが、「おばあさん、お帰んなさい。」と、いつて、出迎えました。それから、「お疲れでしょう。」と、いつて、羽織をぬがしてあげ

にかかると、やんまが、背中せなかにとまっていますので、

「まあ、おばあさん、こんな大きなやんまが、お背中せなかにとまっていますよ」と、いつて、捕とらえてみせました。このとき、おばあさんは、

「やんまが？」と、いつて、はじめて、さつき、男おとこの子が、自分じぶんの後あとを追おってきたわけがわかつたのでした。

「ああ、それなら、あんな顔かおをして、にらむのでなかつた。」と、おばあさんは、思おもいました。

けれども、お彼岸ひがんのおまいりにいつた帰りかえなので、やんまを助たすけてやったと思おもうと、いいことをしたとも考かんえたのでした。

「どれ、どれ、私わたしが、木きの枝えだにとまらせてやりましょう。」と、

いって、おばあさんは、やんまを庭にわの縁側えんがわに近いちか、南天なんてんの木きにとまらせておきました。

「もう、逃にげていったろう。」と、晩方ばんがた、おばあさんが、縁えんが側わへ出でてみると、そこには、やんまの羽はねだけが散ちらばつていました。小ねここのたまが食たべたのです。おばあさんは、これを見みると、驚おどろいて、たいそう立腹りつぷくしました。

「今夜こんやは、家うちへ入いれない。」と、いって、たまをしかつて、外そとへ出だしてしまいました。小ねここは、ニヤアニヤアと鳴ないていたが、そのうち、どこへか行ってしまいました。

「かわいそうに、どこへいったでしょう。」と、家いえの人ひとたちが、いっていました。

「いえ、こらしめてやらなければ。」と、おばあさんは、いつまでも立腹りっぷくしていました。

そのとき、そこへお隣となりの光子みつこさんが、たまを抱だいて入はいってきました。

「おばあさん、たまが、うちのお台所だいどころへきて鳴ないていましたから、つれてきたのよ。」と、いいました。

おばあさんは、たまが、やんまを食たべたからしかつたと、お話をはなしをしました。すると、光子みつこさんは、おばあさんの顔かおを見て、

「だって、たまは、やんまを食たべて、わるいということを知しらないのですもの。」と、いいました。

この子供こどもの、やさしい言葉ことばは、おばあさんに、さつき、自分じぶんも

それと知らないばかりに、どこかの、かわいらしい男の子をにら
んで、わるいことをしたことを思い出させました。

「この年になっても、おばあさんは、ばかだね。光子ちゃん、こ
ちらへおいで。」と、いって、おばあさんは、光子さんの頭をな
でてやりながら、自分にも、こんなような女の子か、先刻の、男
の子のような、かわいらしい孫があつたら、どんなに、楽しかろ
うと思いました。

たまは、いつのまにかおばあさんのひざの上のうって、まるく
なっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「教育・国語教育 5巻10号」

1935（昭和10）年10月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

やんま

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>